

特集：矢作川中流域の陸上生物

古川の今昔 - 矢作川の将来像を考えるために -

The Yahagi River at Fusso, past and present: suggestion toward the goal of restoration

内田 朝子¹⁾・田中 蕃^{1),2)}・洲崎 燈子¹⁾・小川 都¹⁾

Asako UCHIDA , Ban TANAKA , Toko SUZAKI and Miyako OGAWA

矢作川研究No.7では矢作川河川環境復元総合研究事業(通称：古川プロジェクト)の成果を特集した。古川プロジェクトは矢作川中流の古川水辺公園を中心とした区域で、河川工学、生物、人文などの研究者と地元住民が一体となって取り組んだ総合研究である。

プロジェクトの中で生物学的な研究を担当した生物班は古川横断面の生物相の季節変化を把握し、生物相の構成種を食物連鎖も考慮に入れて解析した(田中ほか、2003)。この報告では、生物の水際の環境利用の姿を詳細に横断面に示したが、成果を他分野の研究者並びに地元住民らと共有することを重視したプロジェクトの方針に従って、それを分かりやすく一目で見取れる絵『今の矢作川』(図3、4)に表現した。本来、矢作川研究No.7に挿入すべきでものもであったが間に合わず、本号への掲載となった。絵『今の矢作川』は矢作川研究No.7の「古川横断面の生物」と合わせてご覧いただくようお願い申し上げます。

さて、プロジェクトの成果をもとに、今後、どのように環境復元を進めていけばよいのであろうか。それには、まず、望ましいとされる復元のイメージを抱き、イメージと現状とを対比させることが復元の方向性を見出す重要な過程であると考え。

望ましい矢作川のモデルになる姿を昔の矢作川に求めるとしたら、その姿はいつにさかのぼればよいのだろうか。一つのゴールイメージとしては、「川ガキ」(新見、2002)が普通にみられ、鮎釣りが生業の一部として成立していた1950年代頃までの矢作川が白濁する以前の姿が候補にあげられる(古川ほか、2003)。

古川横断面の生物調査の目的の一つは、古川地区をモデルとして矢作川中流域の環境を考える基礎資料とすることであった(田中ほか、2003)。ここでは、その調査結果を基に作成した絵『今の矢作川』をゴールイメージと対比させることによって、復元の方向性を模索し、望

ましい矢作川中流域の姿が見えてくることを期待した。

一つのゴールイメージとした1950年代の古川の様子『昔の矢作川』(図1、2)は、空中写真や人文班が収集した昔の古川付近の写真(小川、2003)から推定した。絵の中には唯一の既存資料(広編、1963)を頼りに、当時、生息していたであろう動植物も描いた。動植物の大方は、河原の砂礫の広がりや植生の状況から推測して、昔の河原を代表する種類を選んだ。昔の河原には、カワラヨモギ、カワラケツメイ、カワラナデシコやカワラハンミョウといった不安定で苛酷な河原の環境に適応した生物が生息していたと考えられる。これに対し、『今の矢作川』では、田中ほか(2003)が示した通り、マダケ林が発達し、堤内地の平地林を思わせるような景観を呈した高水敷には多様な動物の生息が確認されている。

矢作川の今昔の姿を対比させると、ここ半世紀の変化 - 昔は広々とした河原が広がった景観であったのが、今では、高水敷や中洲は土砂の堆積と植生の発達によって高く盛り上がり、低水路との高低差が顕著になった(大嶋ほか、2002; 洲崎、2001) - が、一目で見取れるであろう。

1950年頃の矢作川をひとつのゴールイメージに想定するとすれば、現在までの矢作川中流域の変化の特徴が明らかになる。そして、人が川と関わっていく上で、これらの絵が「矢作川らしさとは何か？」を考え、矢作川中流域の河川環境の復元に向けてどのような方向性があるのか、そして、どのような河川管理・整備が必要であるのかを考えるきっかけになればと願っている。

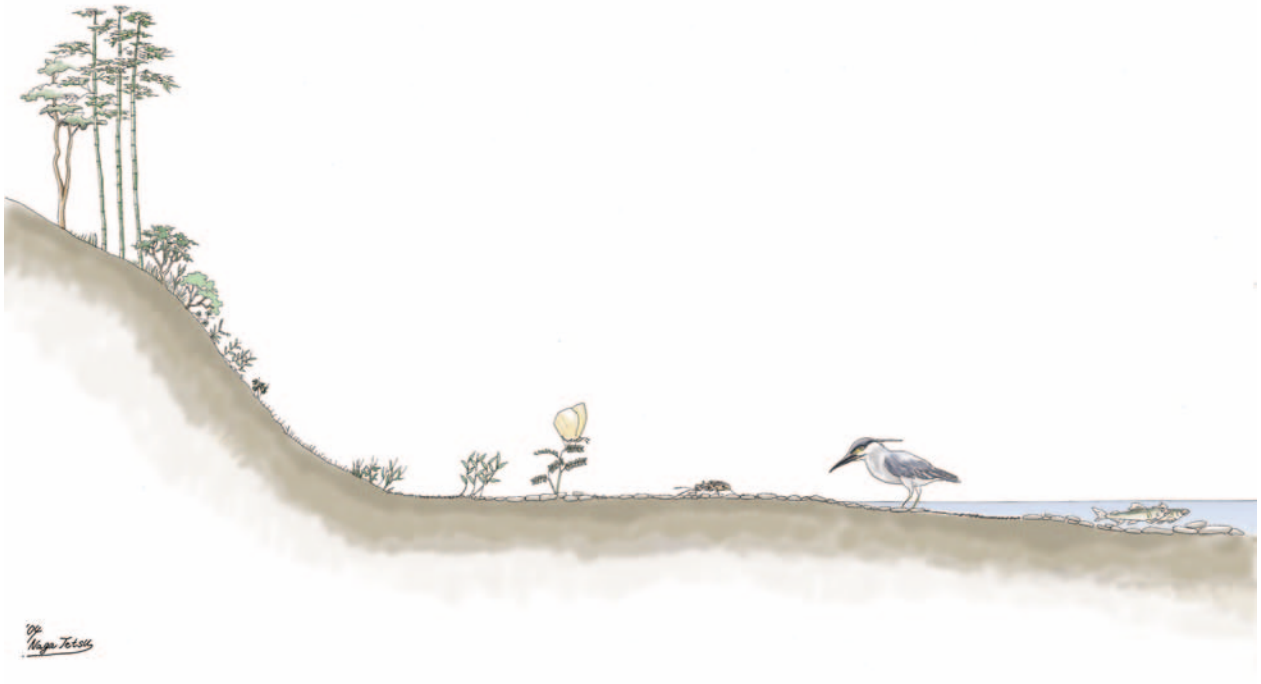


図1 昔の矢作川（横断面）.



図2 昔の矢作川（全景）.



図3 今の矢作川（横断面）.

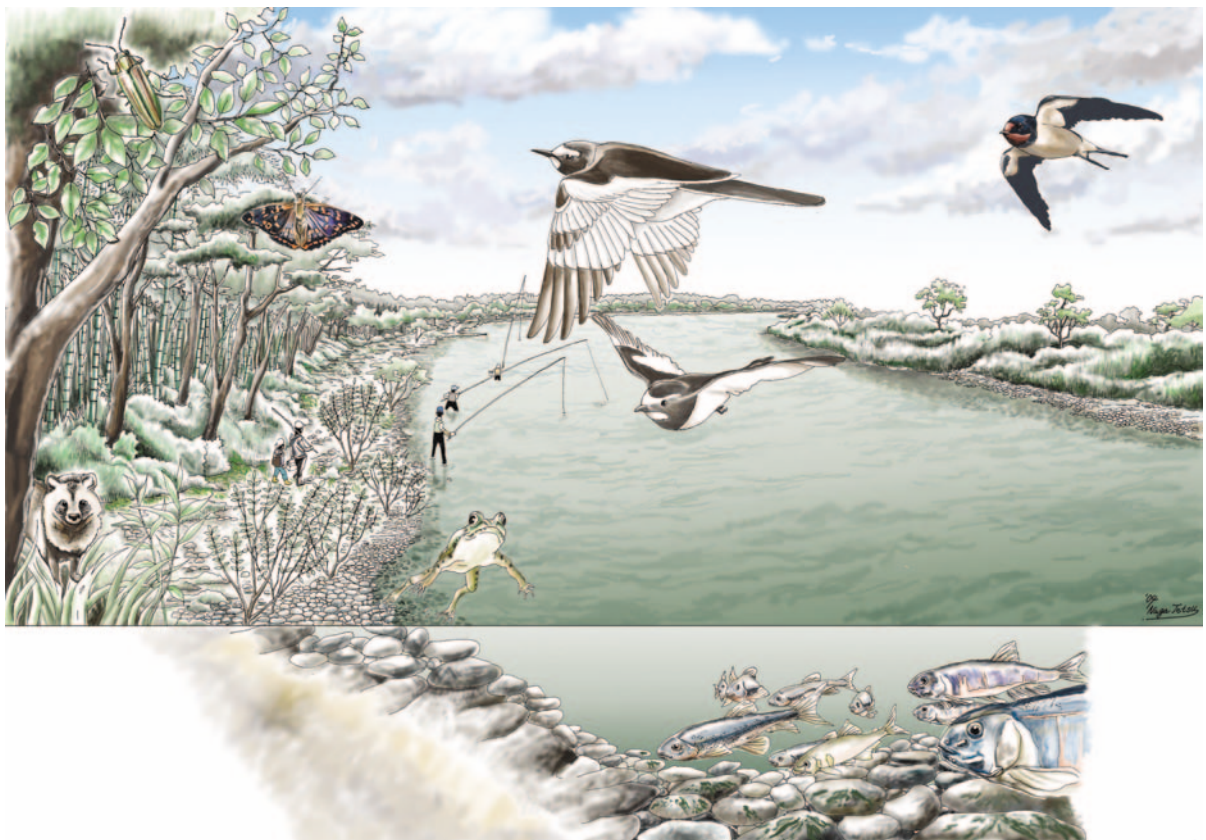


図4 今の矢作川（全景）.

謝 辞

昔の矢作川の絵を作成するにあたり、扶桑町在住の村山秀夫さんと築山巖さんには、古岸水辺公園にて、昔の様子を思い出していただきながら昔の絵の整合性を確認していただいた。矢作川研究所総括研究員の間野隆裕さんには、昔生息していたであろう陸上昆虫についてご助言をいただいた。4枚の絵は環境科学株式会社の永田哲生さんに描いていただいた。以上の方々にこの場を借りて厚くお礼申しあげる。

引 用 文 献

- 古川 彰・川田牧人・芝村龍太・小川 都（2003）矢作川とひとの暮らし．矢作川研究，7：105-168．
- 広正義編（1963）矢作川の自然．名古屋女学院短期大学．
- 新見幾男（2002）矢作川観察ノート(17) 五六川の川ガキたち．豊田市矢作川研究所月報Rio，48．
- 小川 都（2003）矢作川のひとの暮らし 4．写真でみる川辺の変化 - 調査方法および結果の検討 - ．矢作川研究，7：157-162．
- 大嶋真弥・松浦正裕・内田臣一（2002）矢作川中流部における河床と水位の経年変化．河川環境復元調査研究事業（矢作川古岸プロジェクト）平成13年度調査報告書．
- 洲崎燈子（2001）矢作川中流域の堤外地における植生と土地利用の変遷．矢作川研究，5：13-26．
- 田中 蕃・内田朝子・洲崎燈子・小沢康彦（2003）古岸横断面の生物．矢作川研究，7：33-104．

- | |
|---|
| 1) 豊田市矢作川研究所：〒471-0025 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F |
| 2) 名城大学農学部生物資源学科：〒468-8502 名古屋市中天白区塩釜口1-501 |